

# エナクティヴィズムの可能性ーホワイトヘッド哲学との比較よりー

平田一郎

関西外国語大学短期大学部

「エナクティヴィズム(enactivism)」とは、メルロ・ポンティなどの発想を取り入れ、心の身体性、特に行為との関係を強調したヴァレラをその先駆とする<sup>i</sup>。それゆえこれは現象学との親縁性が高い。一方、ヴァレラ自身の原著の副題にもあるように、コネクショニズム以来、脳科学との関係が密接であった認知科学に対する新たなアプローチの可能性も開いた<sup>ii</sup>。そしてそのような認知科学におけるエネクティヴ・アプローチによる研究を背景にしながら、心の哲学においてエナクティヴィズムの立場から知覚論を論じたのが、ノエであった<sup>iii</sup>。ノエは、知覚は行為の一種であると主張する。即ち知覚とはただ外界からの情報を受動的に受け取るのではなく、知覚と身体技能との構成的関係(constitutive relation)を主張する。例えば何かを見ることは、その見る対象への接近による視覚像の拡大、眼を背けることによって見えなくなる、等々の身体技能と密接に関係していることになる。

こういったノエの議論について、本発表では二つの点に注目する。第一に最も受動的と思われる知覚さえある種の行為とすることから帰結する、経験を活動とすること。第二に心は脳の内部の生起ではなく、むしろ脳の外側に広がる「心の中の脳」という外在主義である。

第一の「感覚運動技能(sensorimotor skill)」という身体技能によって知覚経験が構成されるということについて次のようなことを考えてみたい。「机を見る」という場合と、「机の上の本を見る」という場合においてどのような違いがあるのであろうか。確かにどこに焦点が合わされているかということで、両者の経験に違いがある。しかし意識的な焦点があっていないにせよ、「机を見る」場合には、同時に「机の上の本を見る」のであり、逆に「机の上の本を見る」場合に同時に「机を見る」のではないのか。即ちわれわれはどちらの場合も同時に二つの知覚をしており、ただどちらがより意識されるかの違いしかない。

この限りで「行為としての知覚」はGoldman<sup>iv</sup>的に解釈された複数の行為を同時に為すこととパラレルに考えられるのではないのか。即ち「引き金を引く」「銃を撃つ」という二つの行為を同時にしているのと同じことと考えることができる。これは時空的には行為が重ねあわされていると見なせる。

また知覚経験を構成する「感覚運動技能」についても、問題にすべきことがある。ここでノエはかなり意識的な行為について考えているが、知覚経験を構成するのは必ずしも意識的なもの、意図的行為に類するものである必要はないのではないのか。反射的、あるいは無意識的行為であっても、知覚経験を構成する活動ということであればそれで十分なのではないのか。

ここでわれわれはホワイトヘッドを参考にする。彼は、意識は経験の上澄みである

として、無意識的な行動、反射的な活動、それどころかわれわれが通常経験と見なさないような物理的活動も「経験の活動」(彼の用語でいうところの「現実的存在」[actual entity])と見なす。すると彼の立場からは、脳髄の中の電氣的な生起もまた「経験の活動」として、知覚経験を構成するということになる。その場合ホワイトヘッドにおいては、客体はアフォードするが、アフォードする客体それ自身はあくまでも可能態であり、それを現実化するのが「経験の活動」としての現実的存在である。ノエの感覚運動技能はまさにアフォードされる客体を現実化する活動と考えれば良い。

もっとも、現在のホワイトヘッド解釈の主流は、微小な現実的存在、即ち脳髄の電氣的な生起のみが現実的存在とするものである。このような立場に立つ限り、ホワイトヘッドの人間経験についての探求は、内在主義に立ち、脳髄についての神経科学として認知科学を考える立場と整合的であり、実際そういった意味での神経科学の成果によってホワイトヘッド哲学を解釈しようとする研究<sup>v</sup>が有力なものとしてある。

しかしここで第二の論点としての外在主義を考慮に入れるべきである。ノエの「心の中の脳」の議論は、外在的な知覚経験があるということを示している。それゆえホワイトヘッドについても外在的な現実的存在—脳髄の生起を超えたより「大きな」経験の活動があると見なしてよい。ただし、この議論は、意識的はでないにせよ、内在主義的な脳髄の中の経験があるということは排除していない。まさに内在主義的な知覚経験と、外在主義的な知覚経験が、Goldman 的な行為の重ね合わせに類する形で重ねあわされていると考えてよいのではないのか。その場合机の上の本を見ることと、机を見ることが共在するように、現象学的な観点からは外在主義的な知覚経験が注目され、神経科学的な観点からは内在主義的な知覚経験が注目されるが、両者は共在するのである。これはまさに具体的なものは何であれ現実的存在である、とするホワイトヘッド哲学についてのウォラックの解釈<sup>vi</sup>に相当する。

しかしこの外在主義的な経験と内在主義的な経験とはどのような関係を持つのであろうか。Goldman 的な複数の行為であれば「によって関係」(by-relation)で結ばれる。しかしまさに内在主義的な神経科学的対象の経験と外在主義的な巨視的現象学的経験との関係については、まさに現代の心の科学においてもアポリアとして解くことのできない問題としてある。この問題については、ホワイトヘッド哲学を参考にして何らかの示唆ができるか、発表において考えてみたい。

---

<sup>i</sup> Varela, F., Thompson, E., and Rosch, E., 1991 *The Embodied Mind: Cognitive Science and Human Experience*. Cambridge, MA: MIT Press. 『身体化された心—仏教思想からのエナクティブ・アプローチ』、田中靖男訳、工作舎、2001年

<sup>ii</sup>例えば Stewart, J., Gapenne, O., and Di Paolo, E. A. ed. 2010 *Enaction: Toward a New Paradigm for Cognitive Science* Cambridge, MA: MIT Press など

<sup>iii</sup> Noë, A., 2004 *Action in Perception*. Cambridge, MA: MIT Press. 邦訳『知覚の中の行為』、門脇俊介、石原孝二監訳、春秋社、2010年

<sup>iv</sup> Goldman, A., 1970 *A Theory of Human Action*, Englewood Cliffs, N.J: Prentice-Hall

<sup>v</sup> Weber, M., Weeks, A., ed. 2009 *Process Approaches to Consciousness in Psychology, Neuroscience, and Philosophy of Mind*, Albany, NY: S.U.N.Y Press

<sup>vi</sup> Wallck, F., B., 1980 *The Epochal Nature of Process in Whitehead's Metaphysics*. Albany, NY: S.U.N.Y Press